ナイロン・ザイル事件

告訴ざたになった実説『氷壁』

昭和30年元旦午後三時ごろ、前穂高岳第二テラス付近の三人。矢印の下の黒点、上から石原、若山、沢田の三君。（北岸根を登っていた大島健司氏が撮影）

三人はこのザイルで体を結び合い、元日の早朝ベース・キャンプを出発したが、この日は日没のため、頂上の下約三十メートルのところで、軽テントをかぶって夜を明かした。翌朝まず石原君が先頭となって、頂上直下につき出た岩の上に出ようとしたがうまく行かず、代って若山君が先頭に立った。しかしこれもうまく行かず、もとに戻ろうとしたとき、若山君は足を滑らせて下に落ちたのである。

三人の体はザイルで結ばれているし、石原君と若山君との間には、つき出た岩があるのだから、ふつうなら若山君の体はつき出た岩からブラ下った形になるはずだが、若山君は、「氷壁」の描写のように雪煙りの中に消えてしまった。ザイルは何の手ごたえもなく、岩角のところで、プツリと切れていたのである。残された二人はこれで登る意欲を失い、その上凍傷にかかって、翌日救援隊に助け出されたが、若山君の方は何回かの捜索もむなしく半年後の七月、ザイルを結んだままの死体となって残雪の中から発見された。

「事件はこの時起ったのだ。魚津は、突然小坂の体が急にずるずると岩の斜面を下降するのを見た。次の瞬間、魚津の耳は、小坂の口から出た短い烈しい叫び声を聞いた。

魚津はそんな小坂に眼を当てたまま、ピッケルにしがみついた。その時、小坂の体は、何ものかの大きな力に作用されたように岩壁の垂直の面から離れた。そして落下する一個の物体となって、雪煙りの海の中へ落ちて行った」

これは、朝日新聞に連載中の井上靖氏の小説「氷壁」の一節である。若い登山家の小坂と魚津が、北アルプスの峻峰前穂高岳（海抜三、〇九〇メートル）の氷壁を登攀中、ナイロン製のザイル（登山用のロープ）が切れて、小坂が墜死する状況を描いたものだが、このザイルがなぜ切れたかという問題をめぐって、小説の主題は今複雑に展開してきている。

ところで、この小説にはヒントとなった事件がある。

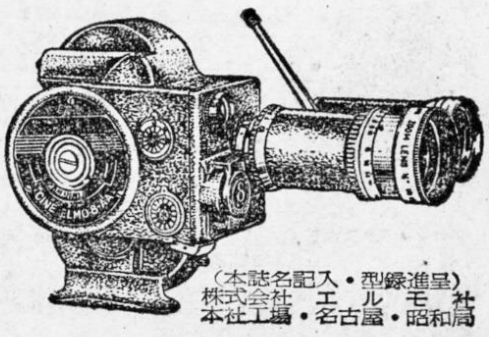
前穂高東側の攻撃

事件は一昨年の一月二日、小説と同じ前穂高岳の東側、頂上から約二十メートル下の岩壁で起った。ここは北アルプスの中でも最もけわしい穂高岳の、その中でもまた一番むずかしいとされているルートである。

この氷壁にとりついたのが、三重県鈴鹿市にある岩稜会（代表者伊藤経男氏）に属する十二名のグループだった。岩稜会は三重県神戸中学（現在高校）の卒業生を中心とする山岳団体で、団体としては戦後派だが、穂高岳と取組んだ経験は深く、屏風岩の正面の初登攀に成功した経験も持っている。

攻撃隊にはリーダーとして石原国利（当時中央大四年）隊員として沢田栄介（三重大四年）若山五朗（同一年）の三君が選ばれた。三人とも冬山にかけては数年の経験の持主であり、装備も例年と変らなかったが、冬山に欠くことのできないザイルだけは、この年から東京製綱（東京都台東区浅草橋）で造ったナイロン製の直径八ミリのものを使うことにした。ナイロン・ザイルは、フランスの登山隊がヒマラヤのアンナ・プルナ征服に使って以来、これまでの麻製のものより便利だというので、世界の登山家の注目を集め、ザイル製作には古い歴史を持つ東京製綱でも、二、三年前から試作を開始していたものである。

8mm エルモ撮影機
スームレンズ付



（本誌名記入・型録進呈）
株式会社　エルモ社
本社工場・名古屋・昭和局

故若山五朗氏（右）（29年4月30日，前穂高岳頂上で）

登山家の名誉

問題は、むしろこの遭難後からはじまった。岩稜会の遭難と前後して、死者こそ出さなかったが、東雲山岳会（東京）大阪市立大山岳部でも、ナイロン・ザイル切断の事故が報道されると、「ナイロン・ザイルそのものが弱かったのだ」と見る人と、「ザイルは強いが使い方を誤ったのだ」と考える人とが出て来た。前者はリーダーの石原君および岩稜会の見解で、「このようにもろく切れてしまうのは、鋭い岩角に対してナイロン・ザイルはきわめて弱いのではないか」との疑問を持ち、若山君の実兄石岡繁雄氏（名大学生部勤務）が中心になって、名大工学部で実験して見たが、結果は麻にくらべて弱かったという。

一方、メーカーの東京製綱では、山岳団体へ、「しばらくナイロン・ザイルの使用をやめるように」と通知した後、登山装備の権威として知られている阪大工学部教授篠田軍治博士（前日本山岳会関西支部長）に依頼して、強度についての実験を行うことになり、四月二十九日に篠田教授指導によって、東京製綱蒲郡工場で公開実験が行われた。九十度と四十五度の角度に磨かれた岩角を使って、麻とナイロンの強度を実験したのだが、その結果が五月一日付の中部日本新聞に、

「ナイロンの強度は麻の数倍」

と報道されたのである。

こうなってくると、岩稜会および石原君の立場は苦しいものになって来た。ナイロンが強いとすると、石原君がザイルの使い方をまちがえたというのか？　そしてさらに臆測すれば、若山君とともに自分たちが落ちるのを防ぐため、石原君がザイルを切ったとでもいうのか？　それとも、若山君の方の結び目が解けたのを隠すために「切れた」といっているのか？（登山家の間ではザイルの結び目が解けるのは最大の恥辱とされている）

このような疑問を残したまま、実験の詳報がしばらく待たれていたが、やがて篠田氏が学会に報告した結論は「ナイロン・ザイルは岩角ではマニラ麻より強いが、ヤスリのようなものでこすると麻より弱い」ということだった。このヤスリでこする方は、蒲郡実験以前に、東京製綱にナイロンを提供している東洋レーヨンの実験室で行われたものだという。

こうなると蒲郡の実験を報じた新聞記事が問題になってくる。岩稜会では、この記事によって受けた疑惑を釈明してくれるようにと、何回か篠田氏に要求した。しかし篠田氏がこれに応じないので、岩稜会は昨年六月、石原氏の名で篠田氏を名誉棄損のかどで告訴した。担当の大阪地検斎藤正雄検事による

篠田軍治教授

と、「起訴、不起訴は今年中には決定するだろう」ということだ。

強度実験をめぐって

以下、関係者の語るところは――。

石原国利氏（現在名大学生部勤務）「篠田先生は、ヤスリの実験でナイロンが弱いことを知っていながら、蒲郡では強いとしか見られない一方的な実験をされた。そして半年後にまた、『弱い点もある』と発表されている。私たちは先生をやっつけるつもりは少しもない。ただこのような社会的に重大な問題なのだから、一言わびていただければいいのです」

笠井亘氏（蒲郡実験を取材した中日運動部記者）「私は目で見た通りを書いた。しかしその時私はナイロンがヤスリのようなものに弱いとは知らなかった。今から思うとあの時は、ナイロンの強い面だけを実験したとしか思えない」

篠田教授「ナイロン・ザイルの強度試験と穂高での遭難は全然無関係だ。遭難者が出たことを実験に結びつけるのは私には迷惑な話だ。実験ではナイロンは切れることもあるし切れないこともある。本当の結論を出すには二、三百年もかかるだろう」

高柳栄治氏（東京製綱常務）「あの実験はグライダーの曳航索の強度を研究したいと思っていた時に、たまたま遭難があったのでやって見たまでで、特別の意図などない。ナイロン・ザイルはショックには強いが、鋭い角には弱いことがわかったから、注意して使えば有用な登山道具だと思う」

○

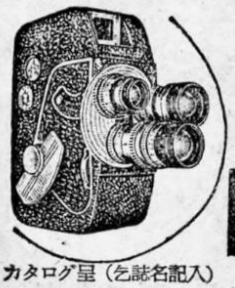
最後に、井上靖氏はこの問題について次のように語っている。

「『氷壁』は純然たる私の創作だから、実際の事件には小説の登場人物のような人は一人もいない。人間を書く上の一つのモメントとして、実際にあった事件から、本質をなす部分を借用してきているということになろう。

岩稜会の石原君はよく知っているが、材料は、作家として料理するから、書いたものは石原君とは関係なくなることは覚悟してくれといっておいた。同じことは、まだお目にかかったことはないが篠田氏についても言える。

しかし、告訴問題とは別に、ナイロン・ザイルが登山家の生命を預るものである以上、関係者がこんどの事件を生かす方向に動くべきことだけは明らかだろう」

本誌・小松　恒夫



シャッター開角が
変えられる……
世界最初の8㎜シネカメラ
¥47,800　3レンズターレット
革ケース ¥2,500
アルコ"8"
カタログ呈（乞誌名記入）
アルコ写真工業株式会社
東京都品川区五反田2の370